



# 校報 こなかだい

特別号  
千葉市立小中台中学校  
R 8. 3. 24



学校教育目標 「自ら考え正しく判断し、実践できる生徒の育成」

## 令和7年度 第79回 「卒業証書授与式」



### 「学校長式辞」

校長

柔らかな春の空気が、卒業される皆さんの門出を、優しく包み込んでいるかのようです。

本日ここに、ご来賓の皆様、保護者の皆様をお迎えし、第七十九回卒業証書授与式を挙行できますことに、心より感謝申し上げます。卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。義務教育の課程を修了した皆さんの目の前には、広大な未来が広がっています。しかし、その未来への扉を開いた先にある世界は、決して晴れの日ばかりではありません。「予測が困難な時代」皆さんがこれから飛び込んでいく社会は、そのように言われ続けています。生成AIの飛躍的な進化や、世界情勢の目まぐるしい変化など、昨日までの常識があつという間に過去のものとなる、そんなスピード感のある時代です。

こうした時代だからこそ、私は皆さんに「不易流行」という言葉を贈ります。

「流行」とは、変化すること。皆さんが、この「予測が困難な時代」を生きていくためには、これからの生活に必要な知識や技術とともに、環境の変化に応じるしなやかさを身に付けることが大切です。新しい技術を使いこなすことや、多様な価値観を受け入れる柔軟さは、これからの時代を生き抜くための翼です。変化を恐れず、新しい風をしなやかに捉えてください。

「不易」とは、変わらないもの。AIがどれほど進化しても、昔から変わらない大切なものがあります。人の痛みを想像する「思いやり」、目を見て交わす「挨拶」、約束を守る「誠実さ」、そして家族や友と笑い合った温かい「記憶」。デジタルの画面越しではなく、心と心を通わせた経験こそが、これからの人生を支える大切なものであることに、変わりはありません。

そして、今日この日から、ここ小中台中学校は、皆さんの母校になります。時代が変わっても、台中での思い出は変わりません。母校は「不易」の場所です。「不易流行」とは、変わらないものを基本にしつつ、状況に応じて時代の流れを取り入れ、柔軟に変わっていくことが大切だということを意味しています。時代や社会が変化しようとも、昔から変わらない大切なものを守っていきながら、新しい時代の風を受けて、どこまでも高く羽ばたいていってください。

保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。九年前、大きなランドセルを背負い、まだあどけないお子様の手を引いて歩いた日のことを、昨日のこのように思い出されるのではないのでしょうか。

目の前にいるお子様の姿をご覧ください。入学した頃には少し大きかった制服が、今ではすっかり体に馴染み、あるいは小さく感じられるほど、体も、そして心も、たくましく成長されました。

思春期特有の難しさや、感染症の影響など、決して平坦ではない道のりもあったことと拝察いたします。しかし、悩みながらも一歩ずつ大人へと近づいていくその背中が、未来を切り拓く力強さに満ちています。多感な時期のお子様を、時に厳しく、時に温かく見守りつつ、本校の教育活動にご理解とご協力をいただきましたことに、心より深く感謝申し上げます。

「不易流行」という言葉に加え、最後にもう一つ、私の好きな言葉を、皆さんに贈ります。

「雲の向こうは、いつも青空。」

『若草物語』の作者、ルーイーザ・メイ・オルコットの言葉です。長い人生、時には厚い雲に覆われるような困難に出会うこともあるでしょう。しかし、その雲の向こう側には、必ず変わらない青空が、そして輝く太陽が待っています。

自分を信じ、友を信じ、希望という名の青空を目指して、「台中プライド」を胸に、力強く羽ばたいていってください。二八四名の卒業生の皆さんの前途が、光り輝くものであることを心から願い、式辞といたします。

## 「在校生送辞」



在校生代表

暖かな春の日差しが校庭を包み込み、花々が咲きはじめるこのよき日に、三年生の先輩方がご卒業の日を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

先輩方と過ごした日々を思い返すと、笑顔や励まし、そしてたくさんの学びが私たちの心に深く刻まれています。当たり前のように校舎でお会いしていた先輩方が、今日でこの学び舎を巣立っていくのだと思うと、胸の奥がぎゅっと締め付けられるような寂しさを感じています。私たちにとって先輩方はいつも少し先を歩いている憧れの存在でした。部活動では、先輩の優しさに何度も支えられました。落ち込んでいるときに掛けてくださった一言、励ましの言葉、その一つ一つから勇気をもらっていました。また、気持ちが緩んでしまったときには厳しく向き合ってくださいました。その厳しさは私たちを本気で思ってくださいているからこそものだと感じられました。総合体育大会直前の最後の部活動、部員全員で組んだ円陣。先輩方の笑顔を見た瞬間、「この人たちの背中を追いかけてこられてよかった」と心から思いました。円陣と笑顔の温もりは今も心の中で輝き続けています。体育祭では、全力で取り組む姿に心を打たれました。特に、学級対抗リレーでの真剣な表情が忘れられません。バトンを握る力、全身で駆け抜ける姿から「本気で挑むことの恰好よさ」を教えてくださいました。また、応援の姿も印象的でした。声をかまして仲間を鼓舞し、笑顔で励まし合う姿を見て、勝ち負け以上に仲間と心をつなげることに専ら学びました。そして、合唱コンクール練習。中には意見がぶつかり合うこともあったと思います。思うようにいかず悔しい思いをすることもあったはずですが、しかし本番では、胸に響く歌声がホールいっぱいに広がっていました。その瞬間、クラス全員が一つになっていることと、先輩方がこの三年間で積み重ねてきた努力のすべてを感じました。先輩方が歌っていた時間は、私にとって胸がいっぱいになる時間でもあり、かけがえのない思い出となるものでした。生徒会や委員会では、誰も見ていない場面でも行事の準備を進める姿がありました。新入生歓迎会や予餞会なども陰で支えながら、会の進行をしてくださったおかげで、私たちは楽しく充実した時間を過ごすことができました。

先輩方は、何か特別な言葉で教えてくれたわけではありません。毎日の姿そのものが、私たちにとって何よりの教科書でした。廊下ですれ違った時の挨拶、困っているときに掛けてくださった一言、さりげなく見せてくれた優しさ、その全てが私たちを支えています。もう校舎で先輩を目にすることも、行事で先頭に立つ姿を見ることもできないと思うと本当に寂しいです。けれど、先輩方が残してくださったものは、確かに私たちの心に残っています。先輩方が築いてくださった伝統を受け継ぎ、「台中プライド」を胸に頑張っていきます。

先輩方のこれからの道は楽しいことばかりではないかもしれませんが、それでも、ここで過ごした三年間の日々と、共に笑い悩み、支え合った仲間の存在は大きな力になるはずです。自分を信じて、それぞれの夢に向かって進んでください。三年間、本当にありがとうございました。私たちは、ずっと応援しています。先輩方の未来が希望と幸せに満ちあふれたものでありますよう心よりお祈り申し上げ、送辞とさせていただきます。

## 「卒業生答辞」



卒業生代表

暖かく柔らかな光が降り注ぎ、若葉は萌え、桜のつぼみが膨らみ始めたこの良き日に、卒業の日を迎えられることを嬉しく思います。

振り返ると、小中台中学校で過ごした時間は瞬く間に過ぎていきました。三年前の春。まっさらな制服に袖を通し、大きな希望と少しばかりの不安を胸に、私たちはこの体育館から中学校生活をスタートさせました。一からの人間関係、初めての授業や部活動。未知の世界に足がすくむ思いでした。しかし、先生方からの温かい声かけや家族からの応援、先輩方の頼もしい背中が私たちを支えてくれました。おかげで不安な気持ちは晴れ、希望をもって日々の生活を過ごすことができました。中学校生活にも慣れてきた十一月。マザー牧場での校外学習が行われました。煙に目を細めながら自分達で炊いたご飯、できあがったカレーを口に入れた時の感動は言葉にできないものでした。肌寒い空気だった山頂も、帰り際には達成感に満ちた熱気に包まれ、笑顔あふれる最高の一日となりました。

あつという間に一年は過ぎ、私たちは二年生に進級しました。後輩ができ、「これからは自分達が憧れの先輩になるのだ」という思いから、自分の行動により責任をもつようになりました。中学生で初めての宿泊学習だった自然教室。スローガン「団深仲深」のもと過ごした二泊三日は、個人として、集団として大きく成長できた時間でした。終わりの見えない急勾配に息を切らした山登り。炎を見つめながら一日を振り返り、改めて仲間の大切さに気付かされたキャンドルサービス。照れながらも笑顔で踊ったフォークダンス。あの日の記憶は今でも私の脳裏に焼き付いています。

そして三年生になり、私たちがこの学校を引っ張っていく立場となりました。最後の一年を最高の「一年に」。そんな思いが私たちの背中を押し、新しい仲間ともすぐに打ち解け、スタートをきることができました。五月に行われた体育祭。新学級での初めての行事。どのクラスも一位という目標を胸に、仲間との一体感が生まれました。練習で苦戦した学級対抗リレー。声をかけ合う中で絆が深まり、本番では仲間の声援や最後まで走り抜いた友人の姿に、胸が熱くなりました。体育祭後すぐに行われた「京都・奈良」への修学旅行。奈良公園では鹿と遊び、はしゃぎ回り、夜の部屋ではなかなか寝つけず、遅くまで友達と語りあいました。次の日、くたくたになって京都の町を巡りましたが、その疲れを吹き飛ばしたのが夜に行われた学年レクです。ホテルが揺れるほどの大熱狂。あの時の興奮は、青春のページとして深く胸に刻まれています。そして夏。迎えた最後の総合体育大会とコンクール。掲げた目標に向かい、三年間懸命に努力しました。試合に負けて泣いた日も、思うようにいかずに悩んだ日も、仲間とぶつかり合うこともありました。しかし、そのたびに向き合い、支え合うことで、私たちは少しずつ前へ進んできました。本番で全力を尽くした先には、目標に届いた達成感と、仲間の笑顔、あと一歩届かなかった悔し涙がありました。結果は違えど、仲間と励まし合いながら努力を重ねた時間は、かけがえのない宝物です。秋に行われた合唱コンクールは、三年間で初めて三学年合同で行われました。初めは、なかなか声が合わず苦勞しました。しかし、何度も練習を重ねるうちに歌声は一つになっていきました。本番の静まり返った会場で歌い始めた瞬間の緊張、と同時に仲間の声を感じながら最後まで歌い切ったあの時間は、特別なものでした。こうして、中学校生活最後の一年を謳歌していた私たちは、受験という大きな壁にぶつかりました。思うように成績が伸びず落ち込んだり、人と比べて不安になったりすることもありました。それでも、「受験は一人じゃない」そばにはいつも仲間がいました。互いに励まし合い、ときに切磋琢磨し合いながら、共に歩んできました。支えてくれる友人がいたからこそ、私たちは、自分の進む道を見つけ出すことができました。今、皆の顔を見るとその瞳は希望の光に満ちています。

在校生の皆さん。これから皆さんが主役です。私たちが築いてきた小中台中学校の伝統や思い出は、行事や日々の生活の中に息づいています。その一つ一つを受け継ぎ、さらに皆さんらしい新しい歴史をつくってください。時には迷い悩むこともあると思います。それでも仲間を信じ、自分を信じて前へ進んでください。今日まで私たちを支えてくださり本当にありがとうございました。

先生方。未熟で迷ってばかりの私たちに、時に厳しく、時に温かく向かい合い、卒業の日まで導いてくださいました。何気ない励ましの言葉に救われたこともあります。うまくいかないときも、私たちの可能性を信じ続けてくださったことを忘れません。ここで学んだことを胸に、それぞれの道で成長した姿を見せられるよう、努力します。三年間本当にありがとうございました。

そして、お父さん、お母さん。いつも一番近くで私たちを支えてくれて、私たちを温かく包みこんでくれました。注いでくれた愛情を素直に受けとれず、きつくあたってしまった日もありました。それでも私たちの全てを受け入れ、寄り添ってくれました。十五年間、たくさんの愛と思い出をありがとう。これからは少しずつ恩返しができるよう歩んでいきます。

最後に、三年間、同じ時間を過ごした皆。笑い合った日も、ぶつかり合った日も、全てがかけがえのない思い出です。赤学年の仲間たちと、この小中台中学校で過ごした三年間は私の誇りです。ここで得た学びは、必ず、私たちの人生の道しるべとなるでしょう。全二百八十四名、これまで支えてくださった全ての方々への感謝を胸に、小中台中学校へ別れを告げ、それぞれの未来へ旅立ちます。